

戦前合州国に留学した精神病学者たち（上）

——松原三郎、齋藤玉男、石田昇ほか——

岡田靖雄

戦前の日本の精神病学はドイツ精神病学の系統に属するものであった。そこには、日本医学の全体がドイツ医学の圧倒的影響下にそだったということだけでなく、クレペリン (Emil Kraepelin) が樹立した精神疾患分類が世界のおおくの国でうけいれられた（そして、いまもうけいれられている）という事情もある。そして戦後は合州国^①の動態（力動）精神医学の影響をうけて、動態概念を大幅にとりいれている。

吳秀三「我邦ニ於ケル精神病ニ関スル最近ノ施設」（東京医学会創立二十五周年祝賀論文第二輯、一九一三年）は、一九一一年までの精神科に関するさまざまな事情につき記載している。「精神病学専門又ハ之ト関係深キ医師」で海外留学した二五名中で、記載から留学先の国名がはつきりしない三名をのぞくと、留学先はドイツ二一名、オーストリー六名（いずれもドイツと両方へ）、合州国一名となっている。合州国一名とは、このあとくわしくのべる松原三郎であるが、その後合州国に留学した精神病学者は案外におおい。そこで、それらの人について概観し、また戦前における合州国留学の総体としての意義をかんがえたい。名をあげるなかには伝記的事項を充分に確認できていない人もいる。^②『神経学雑誌』雑報などを中心にできるだけ人の動きはおったつもりではあるが、ここにもれた人はいるだろう。ヨーロッパ留学などの帰途などで、合州国は単に視察しただけと判断された人はのぞいた。

一、松原三郎

松原は第一次世界大戦前に合州国に留学したただ一人の精神病学者である。松原の生涯については松原病院から創立五〇周年記念の追憶集『篋』(一九七七年)³⁾がでており、また金沢で松原の二代あとの教授になった秋元波留夫による「松原三郎——フロンティア精神医学者——」(日本の精神医学一〇〇年を築いた人々・第一部)(臨床精神医学、第八卷第一〇号、一九七五年)がある。留学中のことについては寺畑喜朔「松原三郎教授と米国留学」(北陸英学史研究、第五輯、一九九二年)がまとめている。

1、留学まで

松原は一八七七年(明治一〇年)一〇月一九日に金沢市近郊(現金沢市内)に漢学者朝田道一の長男として生まれ、父方祖父の松原の姓をついだ。一八九八年(明治三二年)一月第四高等学校医学部(現金沢大学医学部)を卒業。上京して高田耕安の東洋内科医院で実地の経験をかさね、また翌年二月から東京帝国大学医科大学の病理学選科生となり、さらに片山國嘉教授に法医学をまなび、そして内科学の研鑽もかさねた。片山の推挽で一八八九年(明治三二年)九月には東京帝国大学医科大學精神病学選科生となって、精神病学専攻に転じた。東京府巢鴨病院(当時片山医長)医員兼医科大学助手となったのは、同年一月八日のことである。松原はもともと熱心な医員で、一番はやく出勤して、神経病理学の研究と臨床とに没頭した。わたしの「戦前の精神科病院における脚気の発生状況——巢鴨病院—松沢病院の統計を中心に——」(日本医史学雑誌、第二七卷第二号、一九八一年)に『明治三十三年巢鴨病院医局日誌』から脚気に関する記述を引用しておいたが、死亡にいたる患者の症状をもっともくわしく記録しているのは松原で、そこには「思ひきや色さめはてし花の上に／なほさよあらしふきすさすとは」といった弔歌もつけられている。病理解剖にもっとも熱心だったのもこの人であった。とくに一九〇一年一〇月に帰国して東京帝国大学医科大學教授・東京府巢鴨病院医長となった吳秀三が

もちかえったニスル染色を松原はいちはやく習得して、神経病理学の実績をあげた。一九〇三年の『神経学雑誌』第二卷に四回にわたり連載された「神経細胞ノ一般病理論」は、留学のため未完におわっているが、わが国で最初の神経病理学総論であつた。

ここで留学前の論文の主題を順次あげておくと、試験的亞爾個保爾中毒症状（一九〇二年、討論）、試験的酒精中毒による中枢神経系変化（一九〇二年）、クスマウル氏略伝（一九〇二年）、ゴルツ氏略伝（一九〇二年）、ウィルヒョー氏略伝（一九〇二年）、嗜酒狂鑑定例（一九〇三年、吳への連名）、神経細胞の一般病理論（一九〇三年）、神経衰弱症の治療（一九〇三年、総説）、発作性妄想狂（一九〇三年）、臭素剤中毒の血液所見（一九〇三年）、臭素剤中毒の神経細胞所見（一九〇三年）である。

ところで、一九〇二年四月に吳および三浦謹之助を主幹とする日本神経学会が設立され、その機関誌『神経学雑誌』が同年四月一日に発刊された。はじめ二年間の同誌発行がもつぱら松原の尽力によつていたことは、たとえば三宅鑛一の追悼文（「松原三郎君を悼む」、精神神経学雑誌、第四〇巻第九号、一九三六年）に「明治三十五年春、日本神経学会の創立に際し吳、三浦両主幹の命に従ひて、その雑誌編輯事務に関与し、原著、抄録の蒐集、校正、果ては雑誌発送に至るまで、凡て、皆、氏の一手にて完成せられたることすらあり。こは当時の事情を知れるものの等しく感謝せる所とす」とあるところからも察せられる。『神経学雑誌』第一巻第五号（一九〇二年）にのっている「明治三十四年神経学年報」は一〇あまりをのぞく一二三編ほどが松原による抄録なのである。

2、留学

松原の巢鴨病院在籍は一九〇三年（明治三十六年）一月一七日までであつた。同日松原は横浜出帆の伊予丸で私費で合州国にむかつた。巢鴨病院の同僚であつた北林貞道のしるすところ（「松原教授を追懐す」、『佛』）では、同郷の高峰讓吉が帰朝した折りに合州国留学の利便をきいて、合州国にわたつたのである。出身校の『十全会雑誌』第二十九号（一九〇三年）

に九月二三日発の松原の通信がのっている。そこで松原は、合州国に一年半いて、イギリスに四か月、最後にドイツにいくという計画をのべ、合州国を最初にするについては「小生の専門たる精神病学及び神経病学の研究上には特に便利なる所もあり且つ将来殊に有望なる点もあるべしと確信して米国を先きにしたる次第に有之候」と、当時としては異例だった合州国留学の理由をのべている。合州国で松原ははじめ家事労働により自活していたことからみて、自活の可能性も合州国選択の理由の一つであつたらう。

松原はよくかく人であつた。第四高等学校校医学部在学中『十全会雑誌』の編集委員であつたかれは、鐵腸の筆名で論説、紀行文、新体詩などをしばしば寄稿しており、上京してからは在京同窓生の消息などをかきおくつてゐる。留学中の松原の通信は『神経学雑誌』には計一三回（精神病学教室あてとおもわれるものが七回、三宅あてが一回、三浦・呉あてが二回、不明三回⁽⁴⁾）、『十全会雑誌』には計七回（第一回は母あて一〇〇余通からの抜き書き、他は学友八田智証あて、第四回のもは八田あての二二通⁽⁵⁾）のつてゐる。『神経学雑誌』にはほかの人の海外通信ものつてゐるが、これだけおおくのつてゐる人はほかにない。それもそのはずである。たとえば、松原の第四回通信はニューヨーク神経学会の内容をくわしく紹介してゐて、細字八ページにわたつてゐる。他回のものでは、見学した精神科病院の現況が詳細にのべられてゐる。つまり松原はきわめて筆まめに、しかも的確に合州国の精神病学・神経病学や関連施設の状況を通信してゐて、その内容の学術的価値がたかかつたのである。もつともはじめは、母あてのほかには手紙をかく心の余裕もなかつたのか、『神経学雑誌』掲載第一回のもは一九〇四年六月二六日づけであり、八田あての最初は一九〇六年正月づけである（文面からみて、八田あてにはこのまゝもあつたようである）。寺畑論文は、両誌に掲載されたものにかかれた合州国事情を中心に紹介してゐるが、ここでは松原の留学経過をたどるのが主眼である。

まず、帰朝までの経過をおつておく。一九〇三年一月一七日に横浜をたつて二月四日シヤトル着。二月二四日ニューヨーク着。二月二六日ニューヨーク市 Wards Islands の病理学研究所をおとづれてそこでの研究を依頼し、ま

えから連絡してあったので承諾をえた。二月三日所長アドルフ・マイヤ (Adolf Meyer) に面会。家事労働をしながら研究をつづけ、一九〇五年夏ごろ、秋にヨーロッパにいく計画をとりやめて、同所での研究をつづけることにする。同年八月一日からスタッフ・ハウスにはいることをゆるされて研究に専念できるようになる。一九〇六年八月二日から約一か月、一九〇七年七月一日から同八月一日まで暑中休暇で各地の関連施設を見学。一九〇七年九月八日までに、合州国に永住したいところを母の病気により帰国の決心をさだめる。一九〇八年九月二日ニューヨークを出帆して九月二日アントワープ着。ブラッセル、パリ、ストラズブルク、ブラッセル、バーゼル、ベルン、ツューリヒ、ミュンヘン、ウイーン、プラハ、ベルリン、ハレ、ライプツィヒ、フランクフルト、ハイデルベルク、アントワープ、ロンドン、シンガポールをへて一二月帰朝(たぶん二月三日神戸着)。一九〇九年(明治四十二年)一月三日金沢にかえる。一月二五日上京して、同日日本神経学会の歓迎会あり。

つぎに留学のいくつかの面をみておこう。第一は下宿代の問題で、さいわいこの点を詳述した回顧録(石川県教育会機関誌『河北』第五号、一九二三年一月五日)が『悌』に再録されている。そこには、「余が家もと貧にして普通に下宿して永く研究に従事するに堪えず、前途大いに心細きものあり。勿論国を出づるや既に自活研究を決心せるなり」とある。一二月二四日ニューヨークにつくと、樋口旅館という日本人の旅館に下宿した。合州国人の家庭で家事労働をしてその代償として無料下宿させてもらう方針をたてて、ヘンリーの名で翌年一月一七日の新聞に広告をだし、四月二日からその生活にはいった。午前八時半に家をでて午後四時まで研究所、四時半に帰宅。その前後に炊事、掃除などをしたのである。すみこんだ家庭の都合で、住み込み先は三回かわった。そして一九〇五年八月一日からはマイヤ所長の好意で準職員(助手)として病院の staff house に無料宿泊できることになり、そのあと三年あまりは研究に専念できた。

つぎの問題は病理学研究所の選択である。出発前の十全会あて一九〇三年九月二三日発の通信には、「新紐育にては、
The pathological Institute of the New York State Hospitals of the Insane, 2. Columbia University, 3. The

University and Bellevue Medical College にて精神病学と神経病学との研究に従事すべき予定に御座候就中第一の精神病学研究所は甚だ盛大なるものゝ如く独逸国にては之に匹敵する無きが如くに候」などある。松原の『神経学雑誌』第四卷第八号所載通信によれば、ウォーヅ島には男の患者を主に收容する東マンハッタン病院と女の患者を主とする西マンハッタン病院と（患者は両方で四〇〇〇名をこす）、および病理学研究所がある。研究所所長マイヤについては最後にくわしくのべるが、合州国にくるまえハイデルベルクの *Zelle* 教室で吳とも面識があつた。松原はマイヤ夫人にもはやくから氣にいられ、演説草稿をなおしてもらつたりもしている（日本は一九〇四年二月一〇日にロシヤにたいし宣戦布告をしており、松原が合州国で歓迎されたについては日本という国への関心の高まりもあつたらうが、それよりはかれの勤勉さのためだろう）。かれが助手となつてからの生活も、おなじ通信にくわしい。自室から午前六時半に研究室にいき、自室にかえるのは夜一一時になる、夜九時半になると研究所にいるのは一人だけである。研究室は一室をあたえられている。また、それぞれ週三回の院長による男病院および女病院のクリニク、週一回の研究所講習生へのマイヤ所長によるクリニク、マイヤが教授を兼任しているコーネル大学生へのクリニク、研究所講習生へのマイヤ所長による脳脊髓の胎生学および解剖学の毎日の講義をできるだけできている。

精神病の分類は主としてクレペリンおよびウェルニケの分類法に類しているが、一九〇三年ごろからマイヤの意見によりさらに複雑精密に分類することになった。もちろん、早発痴狂が多数である。両病院の医師による談話会は月一回あるが、「各医員其出でし学校を異にし〔中略〕各医員の抱ける精神病上の系統には、随分異同あり、爲めに討論も一段の活氣ありて、面白し」、「クレペリンの学説を攻撃する盛なる助手もありたり」（神経学雑誌、第五卷第三号）（なお、松原のしるすところでは、合州国の他病院はだいたいクレペリンの体系によつていた）。また、研究所の不定期の談話会、またのちには研究所で昼食後一時間の集談会があつた。松原がうけとめたマイヤの学説がどういふものであつたかは通信にはでない。だが、上記のような学問的雰囲気のなかで松原はそだつたのである。

松原が主としておこなっていたのは神経病理の研究である。かれの研究室には専用のミクロトームもあった。松原についてマイヤに師事した齋藤玉男は『倂』所載「先生の人生土俵場」にこうかいている。「さて教授（マイヤー）の許に辿り着いて最初に見られたのが故人の創業に成る硝子台に描いた脳の伝導路系統の模型であり（中略）この模型が実に精巧緻密なもので硝子面に髄鞘染色標本を裏から当てて置き、表に如実に各径路の輪廓を描いた上で、運動路は赤、感覚路は緑と言った工合に色別けをし、それを連続切片の枚数通りに番号を追って整理したものである。であるから模型を十枚位づつ重ねて横から眺めれば、一つ一つの径路の経過や隣接径路との関係等がそれこそ手に取るより瞭かに判るのである。教室を訪ずれる各国の専門学者はいずれも驚嘆賛美しないものはなかった。あの模型は教室の誇りとして、且は何よりの故人の記念として永く彼の地に輝くことであろう。この模型は故人がマイヤー教授と共にニューヨークのウオーツアイランド病院に暮した頃の製作に係るもので、故人は日中は劇しい医務に没頭し、いつも夕食後の自分の時間に研究室で製作し、夜半になることも珍らしくなかつたと言う。また金沢医学専門学校で松原の最初の門下生となつた福田美明のかくところ（『倂』所載「恩師松原教授」）では、「その業績の標本が米国の研究室から大箱に二杯ぎつしり詰め込んで送られ多額の保険附で届いたのである。」

その学位論文「鬱憂性精神病ノ本態」の審査要旨には「著者ハ紐育州立精神病院研究所ニ於テ精神病ノ臨床的及ヒ病理解剖的研究ニ従事セシコト四年其間ニ経験シタル病床的材料ヨリ鬱憂性精神病ニ関スル此論著ヲ公ニシタリ」とあつて、留学中に臨床的研究にもいそしんだことがわかる。予定された伝記への序としてマイヤがよせた文章（『倂』）には、松原は「特異的の神経毒素をとりだす可能性の研究、解剖例の研究と臨床の仕事とに没頭していた」（原文はイギリス語）とある。

ところで、合州国からイギリス、そしてドイツにわたるのが、松原の最初の計画であつた。一九〇五年一月五日発行の『神経学雑誌』第四卷第八号にのつた通信には、「小生此秋ニ渡欧スベキ積ナリシモ昨今熟考スルニ欧州ニテモ此人

ノ下ニ斯ク自由ニ研究スルコトハ余程困難ナリト思ハレ候ニ付今暫ク当研究所ニ止ル事ニ変更致候」とある。また一九〇七年九月八日づけの八田あて通信（『十全会雑誌』第四九号）には、「小生も母が病気の爲め此夏に帰国すると云ふ噂が専ら盛であつた相ですがサモあるへき事と思はれます、自分一個人のみの事を考へたならば亜米利加永住は最上の策であらうと考へられますが、小生一人のみを一切の生命として生きて居る母の事を思出すと感情上ソナナ事をヤル訳にも行かない」とある（母は心臓病から脳梗塞による半身不随）。松原が合州国のこの病理学研究所にひかれた様子がよくわかる。それは合州国の魅力であるとともにマイヤの人徳であり、松原の帰国後も師弟は人情をかよわせあつていた。

さきに名をだした齋藤が一九一四年一〇月にマイヤのところをたどりつくと、「教授の最初の質問は『ドクトル松原の近況はどうですか』であつた」（先生の人生土俵場）。松原は一九二二—二五年のヨーロッパ留学の帰途合州国によって旧師にあつた。一九三五年に定年退職になるはずのマイヤを日本によぼうと松原が計画していたところ、マイヤの定年が特例延期になつてこの計画が実現しなかつたことも齋藤がのべている。

3、帰国後の研究

金沢医学校就職のことは、合州国出帆前に三宅にだした通信（『神経学雑誌』第七卷第七号、一九〇八年）に「今度小生ハ帰国仕ルベク候帰国後ハ金沢医学校ニ蟄居スル事ニ相成リ申候」として、母が病気のため急に帰国することになつた、とその理由をかいてある。かれが金沢医学専門学校教諭に任ぜられて、金沢病院精神及神経科長を嘱託されたのは一九〇九年（明治四二年）一月二二日である。一九二三年四月には学校の医科大学昇格にもない松原は教授になつた。金沢病院には一八九九年前の精神科病室がもうけられていた。一九〇五年の移転によつてその病室はなくなつていたものを、松原の着任にともない再築に着手され、一九〇九年九月に落成した。その病室につき吳（「我国ニ於ケル精神病ニ関スル最近ノ施設」は、「此新築病室ハツェルレノ如キモノ一個モナク但隨時粗暴ナル患者ヲ收容シ得ベキ様ニ変化シ得ベキ室三室アリ日本建築トシテハ模範的ナルベシト称ス」とする。この定員は一九名であつたが、ときに收容三〇名に達する

こともあり、婦人科病室一棟を借用していた（吳）。

松原が「鬱憂性精神病ノ本態」により医学博士の学位をえたのは、一九一〇年四月二〇日である。五月八日に学校の病理学教室でもよおされた松原博士学位授与記念祝賀会で、委員長金子治郎博士（同窓の解剖学担任の教諭、一九〇五年四月同窓生として二番目に学位をうけている）が開会の辞でのべたところでは、「君が今日提出せし論文は実に堂々たるものにて、『メランコリー』の本態に就て英独両文より成り、実に千有余ページに亘るものなり」（十全会雑誌、第五九号、一九一〇年）。しかし、この原文は印刷されていないようで、その内容は『官報』第八〇四九号（一九一〇年四月二五日）所載の審査要旨によつてうかがうしかない。

鬱憂病では鬱憂がその原発性である主要徴候で、自覚的あるいは他覚的精神作能の制止は副症状である。著者は鬱憂病の原本症には、自覚的および他覚的の制止の状態、自覚的および他覚的の興奮のある状態、自覚的および他覚的に障礙なき状態、自覚的制止あり他覚的制止なき状態を区別し、別症として体質的鬱憂状態、老人性鬱憂状態、体質の低格な鬱憂状態、心機代償障礙ある鬱憂状態、神経病ある鬱憂状態をあげている。

現在精神病学者は鬱憂状態に、躁鬱病の鬱憂状態とクレペリン氏となえる退収期鬱憂病とを区別している。クレペリンはそののちドライフスの説をいれてこの両者を同一視した。著者は、両者を別種として分離することに反対であるが、両者を同一視することにも反対である。両者は近似しているものである。すなわち、ドライフスは退収期鬱憂病は混合状態で、病者の運動不安は躁病の精神運動興奮とおなじだとするが、これは苦悶を生ずる不安激越であつて躁病の不安とはことなる。

鬱憂病でその全経過中に自覚的にも他覚的にも制止症状も興奮症状もないものを著者は単一性鬱病と称し、それが躁病と交代することはないので、これを原本症とみとめた。自覚的制止症状はあるが他覚的制止または興奮の症状はないものも、躁病と交代することはなく、これも一つの原本症である。この単一性鬱病にはさらに、単一性鬱病、偏執性鬱

病、幻覚性鬱病の三種をわけた。後二者で妄想または幻覚は鬱憂と並行するものである。別種で体質低格な鬱憂病は早発性癡呆と、また治癒後は早発性癡呆の残欠性治癒または全治と誤認されることがある。心機代償障礙ある鬱憂状態は、またで、鬱憂状態の発来・退散ともに心臓の代償機能の障礙と一致する、——これが松原の説である。

松原は一九一〇年四月二日の第九回日本神経学会総会（第三回日本医学会第一〇分科会）（第三回日本医学会誌）、一九一一年）で「鬱憂病ノ本態」の講演をしており、それをみると、松原の考え方ははっきりする。鬱憂が主徴であるものすべて鬱憂病と命名したいが、それにはつぎのものがある、——

第一 自覚的にも他覚的にも精神運動抑制のあるもの、——この種のものに後日躁病を間発することがおおく、この種の鬱憂病だけクレペリンの躁鬱病の鬱憂発作にいられてよく、他はいれるべきでない。

第二 自覚的および他覚的の精神運動の不安（煩悶）を有する鬱憂病、——クレペリンが更年期鬱憂病となえたものだが、これは若年者にも発し、これは後日躁病を間発することはない、

第三 自覚的および他覚的に精神運動の障礙なき鬱憂病、——これには幻覚性単純性鬱憂病、妄想性単純性鬱憂病、単純性鬱憂病とある、

第四 自覚的精神運動抑制はあるが他覚的にはそれのない鬱憂病、——ウェルニケの感動性鬱憂病に類似するが、それと同一ではない、

第五 複雑性鬱憂病は鬱憂症と他の躁病症とが混在するもので、クレペリンの混合状態とおなじものと、それに属さない混合状態とがある、

変型 これは前記審査要旨で別種とされたものとおなじであるが、まえに「神経病アル鬱憂病」とされていたものが「官能的神経症ニ併発スル鬱憂病」とはつきりし、官能的神経症としては神経衰弱症およびヒステリがあげられている。

松原は自分の講義のドイツ語による要旨を印刷して学生にわたしていた。一九一七年卒業の坂東三範⁶がそれを製本し、

“Die Neurologie, Psychiatrie u. Gerichtliche Medizin von Prof. S. Matsubara”と題つたのついでにおつた(ちなみに松原は一九〇九—一九一四年と法医学講義も担当していた)。それをみると、松原のいう鬱憂性精神病の位置づけはなおはっきりしてくる。精神病学各論では、躁鬱病につづいて退行期メランコリー、鬱憂性精神病をあげている。そして鬱憂性精神病ではツィーエン(G. T. Ziehen)説につづいてクレペリン説をあげ、ついで“Depressive Psychosen nach Matsubara”として、上記説に相当する項目があげられている。つまり、クレペリンは鬱憂状態が主症状であるものを躁鬱病にまとめたのにたいし、松原は鬱憂が主症状であることをすべて鬱憂性精神病としており、躁鬱病の鬱憂発作もこちらにふくめることにしたのである。

「精神病ノ分類ニ関スル私見」(金沢医学会会報、第一号、一九一〇年)から上記説に關係する部分をあげておこう。クレペリンは躁狂と交代する鬱狂も、ただ一回発作する鬱狂も鑑別できぬとし、躁狂も鬱狂も同一の病的機転によるとしてそれを躁鬱狂と命名した。「然レトモ余ノ信ズル所ニヨレバ此クレペリン氏ノ説モ其診査法ノ不完全ナルガ爲ニ鑑別スルコト能ハザルモノニシテ若シ精密ニ診査セバ鬱憂状態中ニテモ只一回丈ケノ発作ヲ見テ夫レガ鬱憂性発作ノミニ終ル精神病ナリヤ或ハ他日躁狂ト交代的ニ発作スベキ鬱狂ナルヤヲ鑑別スル事決シテ不可能ニアラズ。」鬱憂患者で感情鬱憂のほかに観念連合もおそくなり患者の挙動・行爲も遅徐となるのが常で、患者自身もそれを自覚してしきりにうったえる、——この種の鬱憂狂は後日躁狂と交代する種類のものである。患者の感情は鬱憂するが精神運動の抑制は自覚せず他覚的にも患者の言語および行爲はすこしも遅徐とならぬもの、また患者が主観的に行爲不能を自覚してしきりにそれを医士にうったえるが患者の行爲は他覚的に毫も遅徐とならぬものがある。こういった鬱狂者に後日躁狂が発することはない。「要スルニクレペリン氏ノ鑑別診断ハ頗ル粗漏ノモノニシテ種々ノ鬱狂ニ於ケル微小ノ差異ヲ発見スルコト能ハズト唱フルモ精密ニ心理学的ニ研究スレバ其異ル所ヲ発見シ得ル事左程ニ困難ノ業ニ非ラズト信ズ」(なんと手きびしい批判か！)。

またこの論文で松原はクレペリンの早発痴狂概念にも批判をくわえている（それは後述する）が、また、クレペリンの分類説は自分の意見と衝突する点がおおいが、いま世上におこなわれているおおくの分類法中ではもつとも穩当にちかひ、として、クレペリンの精神病分類法を紹介している。

ここで、わたしがたしかめた範囲で、帰国後の松原の研究主題をあげておこう。自家考案の脳切断器（一九〇九年、題名だけ）、脳髓内神経線維経過の研究法（一九〇九年）、欧米精神病院の近況（一九〇九年）、精神病の分類（一九一〇年）、神経原線維（一九一〇年）、鬱憂病の本態（一九一〇年）、脊髓癆性幻覚症（一九一〇年）、中枢性顔面神経麻痺（一九一〇年）、早発性癡呆の本態（一九一一年）、神経衰弱の診断と治療（一九一三年）、体質と後天性疾患（一九一三年）、癲癇（一九一三年）、神経衰弱症（一九一三年）、体質異常と神経衰弱症（一九一三年）、精神病の分類（一九一四年）、小児の変質（一九一四年）、謀殺未遂鬱憂患者の鑑定（一九一五年）、石川精一が連名）、奇形発生の原因（一九一四年）、神経病における脈波の診断的価値（一九一七年）、偏執病問題（一九一八年）、治癒すべき早発癡病型（一九一九年）、神経衰弱症における体質異常の知見（一九二〇年）、神経系統緊張の病原的意義（一九二二年）がそれである。

上記のうち「神経原線維」は前記「鬱憂病ノ本態」とおなじ第九回日本神経学会總會における宿題報告であつた（三日目毎二発作スル脊髓癆性幻覚症ノ一例）および「中枢性顔面神経麻痺ノ三例」もおなじところでの報告で、宿題三、一般報告二三の計二六題中松原が四題をだしている。この内容は、神経原線維に関する総説で、そこには合州国での自分の研究成果もおりこまれていろいろのところが、自分の所見と明言しているものはない。また帰国してすぐの第八回日本神経学会總會で松原は、自家考案の脳切断器および脳髓内神経線維研究法をのべている。後者について「各神経線維ヲ色分ニナシ、連続切片ヲ一枚ツツ硝子板ニ画キタルモノナリ」とのみじかい抄録がついている、——これは前記齋藤がふれている伝導路模型のことだろう。なお福田美明（『倭』）は、「先生永年の研究は学説に非ずして、脳の解剖組織化学方面の綿密至難なる業績が主で、其の数二十を越していたのである」とかくが、これらのほかに神経組織学、神経病理学にふれた研

究業績はまだみつけだしていない。

つぎに早発性癡呆についての松原の説をみていこう。一九一一年の第一〇回日本神経学会総会での報告「早発性癡呆の本態に就きて」(神経学雑誌、第一〇巻第二号、一九二一年)は、「要之、早発性癡呆の本態は先天性素質に帰せしむべきものであり、「一般に内気の人に多く」、「従て同病治法の標的は性格変質の矯正にあらねばならぬ」とするが、あまりにみじかすぎる抄録で、その論拠もでていない。他のものから推測すると松原は、単純な脳器質説や生殖器甲状腺などに関連した自家中毒説を排して、⁽⁸⁾病前性格と環境因子との相互作用を重視しようとしたようである。

一九一八年の第一七回日本神経学会総会での報告「偏執病問題」(神経学雑誌、第一七巻第五号、一九一八年)は、偏執病(パラノイア)は妄想を唯一症状として不治でしかも遅鈍状におちいらぬものであるとするクレペリン説を批判している。蘆原將軍の誇大妄想とされるものは原発妄想でなく、慢性癡揚症における愉快感情に附随した誇大的思想である。また急性の偏執病もある。偏執様状態は先天性変質者および慢性躁病者にもくるが、独立した偏執病には急性のものと慢性のものがある。こういった松原の論にたいし森田正馬は、葦原を慢性躁病というのには反対だ、かれはパラフレニー(経過のながい妄想性癡呆)か偏執病にいれるべきものだ、と討論した。⁽⁹⁾

第一八回日本神経学会総会での報告「治癒スベキ早発癡病型二就テ」(神経学雑誌、第一八巻第九号、一九一九年)は、クレペリンがはじめ治癒することなしとした早発癡病にも治癒するものがあると、男六、女一の自験例をあげ、さらに予後不良な徴候と予後良好な徴候とを提示している。さらに松原は治癒の概念について、リンパ腺炎のちに癩痕を生ずるのは有機体の生活現象として当然であり、同様に、精神病後に些少の気質異常をのこしているから全治と称すべきでないとするのは穏当でない、とのべているのも注目すべきである。⁽¹¹⁾さらに「latente Schizophrenie」に「潜伏性精神離背症」の語をあてている。ブロイレル(Eugen Bleuler)が一九〇八年に提唱したシッオフレーニーを訳したものとしては、この「精神離背症」が最初のものであろう。

精神病分類についての松原の説をみると、かれのクレペリン批判はさらにはつきりする。さきにあげた「精神病ノ分類ニ関スル私見」(一九一〇年)でも松原は、クレペリンの早発癡狂と同様の症状を呈しながら治癒するものがあると指摘している。一九一四年第一三回日本神経学会総会での報告「精神病の分類」(神経学雑誌、第一三巻第七号、一九一四年)では、「我輩は多年クレペリン氏の意見に疑問を抱いて居るので従て其分類法にも賛成することが出来ない」と明言している。クレペリンの早発癡病は広きにすぎ、とくに同氏の緊張病には急性に治癒するものがあり、これらはヒステリーあるいは生来低格者の一時発症としての緊張病様症状である。また早発癡病中の妄想性癡病も広きに失し、パラノイアは狭義に失する。妄想性癡病中パラフレニーに相当するものを我輩はパラノイアにいられている。クレペリンがパラノイアの模範としてあげる好訴病はむしろ先天的変質病にいらるべきものである。クレペリン学派で早発癡病の診断は多きに失するが、わが金沢病院で早発癡病とされるものは全患者の四分の一をわっていて躁鬱病よりすくない。またすべての鬱憂状態を躁鬱病にいれるのは不可能である。初老性精神病と老人性精神病とを区別することも穏当でない。伝染性精神病の分類も適切でない。

松原の精神疾患論の特徴をあげると、第一に、躁鬱病のなかにはいらぬ鬱憂状態を区分していることである。第二は、早発性癡呆(分裂病)の範囲をせばめ、そこに全治可能例をみとめてることである。躁鬱病を両極性(躁鬱性)のものと単極性(ほとんどが抑鬱性)のものにわけるのは最近の世界の精神医学に確定された方向であり、分裂病の範囲をせばめるのも同様である。このように、クレペリン学派の勢いがさかんなときに、松原はまさに今日的といえる見解を主張した。みてきたように、かれのクレペリン批判にはなほだ手きびしいものがあつた。かれの師マイヤは分裂病不治説に反対し、精神疾患を反応型とする考え方を提起しつつあつた。松原の説には師のこの考えがおおきく影響したに相違ない。また、さきにあげたような病理学研究所内の自由な討議も松原の目をひらかせたことだろう。だが、こういった松原の見解がその後の日本の精神病学にどれだけの影響をおよぼしたかという、否定的にならざるをえない。松原

がその見解をもつとつよく主張し・おおきな論著とすることがなかつたこともその一因ではあるが、いまからみると残念なことである。

その他の研究では、まえに列举した研究主題にみるように、神経衰弱症および体質に関するものが圧倒的におおい。それらでは生物学的方向がつよくでてゐる。そして全体を通じてみると、松原の研究では合州国留学の影響とおもわれる特色はだんだんにうすれてきているようである。

4、退官

教諭あるいは教授としての松原は精力的でたいへん勤勉であつた。講義も夏はずしいうちがよかろうと朝七時からはじめることあつた。中年からは頭髪を丸刈りにしたその風貌と迫力とは、ソヴェト革命の父レーニンにて、「西のレーニン東の松原」とも称された。一九二三年四月から一九二五年四月と文部省よりヨーロッパに留学した帰途、合州国に恩師マイヤをたずねたことは、マイヤがよせた「序」(『俳』)にみられる(今回は夫人同伴であつた)。一九二七年(昭和二年)三月に松原は金沢医科大学教授および医長を辞職し、同年五月に金沢市内に松原病院(精神科)を設立した。とくに四九歳。

三宅鑽一の、「松原三郎君を悼む」には「欧米各国を視察中病を獲て本復せず」とある。その病いとは小脳失調であつた。金沢医科大学教授として松原をついだ早尾庸雄および教室員谷野亮一の「故松原三郎博士脳髓ノ病理組織学的所見」(精神神経学雑誌、第四一卷第一号、一九三七年)には、「発病ハ昭和三年八月ニシテ五二歳ノ時ニ当ル。発病当時ニ於テハ言語歩行及ビ書字ニ軽度ナル障礙認メラル」とするが、一九二八年八月というのはおそらく症状が顕著になつてきたときのだろう。一九三一年六月には伝い歩き状態となり、一九三六年(昭和十一年)八月五日に死去した。五八歳。脳所見では、*cerebellopetales Rindengenerationstypus* に相当する小脳萎縮と、小脳軟膜の髄膜腫ならびに大脳および小脳のそれによる栄養障害の所見があつた。松原の墓所は、旧藩時代からの野田山墓地にあり、法号讚朗院釋精博。

松原病院は、二代目岡部保院長ののち、第一男松原太郎（一九〇二年五月三十一日—一九九一年八月三〇日）が院長となり、関連病院二院、精神薄弱関係施設および救護施設計五をもつまでに発展させた。現在は松原太郎の三男三郎が松原病院の院長をしている。

二、齋藤玉男と杉田直樹

ここにとりあげるのは、ドイツ留学中に第一次世界大戦にぶつかった人である。

1、齋藤玉男

齋藤玉男については持田治郎編『齋藤玉男先生の横顔 米寿の祝に寄せて』（多摩病院 東京、一九六八年）、わたしたちがうかがった回顧談を中心にわたしが編集した『八十八年をかえりみて——齋藤玉男先生回顧談——』（大和病院・神奈川県大和市、一九七三年）、岡田「齋藤玉男——超俗の精神科医——」（その人たちの横顔・第三回）（6号線、第六号、一九七七年）、松下正明「^{マサ}齋藤玉男——Folia Psychiatrica et Neurologica Japonicaの創始者——」（日本の精神医学一〇〇年を築いた人々・第二部）（臨床精神医学、第一〇巻第六号、一九八一年）があり、また岡田「羽栗病院訪問記」（日本医史学雑誌、第三六巻第四号、一九九〇年）がふれている。

齋藤は一八八〇年（明治一三年）四月一四日に群馬県勢多郡宮城村に、皇朝医道の医家の三代目として生まれ、第二高等学校をへて一九〇六年（明治三九年）一二月一九日に東京帝国大学医科大学医学部を卒業。翌年一月一日から東京府立巢鴨病院医員、同二月二四日から医科大学助手（精神病学教室）。当時の研究は進行麻痺の病理形態学が主であった。また精神病者私宅監置の調査に参加し、その報告書の控えは現存している。

齋藤が留学をこころざしたのは、日本の学問および師吳にあきたらず、また吳にうとまれていた（宮城村の隣村大胡町の出身で医科大学で七年後輩の茂木一次が学生のころ大逆事件関係者とまじわっており、茂木は齋藤の友人でもあったためらし

い」という事情もあった。

内科の島蘭順次郎の紹介で、かれがついたことのある Ludwig Edinger のところに留学することになり（自費留学）、巢鴨病院医員は一九一四年（大正三年）四月二二日に辞している。ベルリンをへて、フランクフルト・アム・マイン市立病院神経学研究所についたのは開戦の二か月ほどまえだったという。脳の脂肪をそめる仕事につかうカエルがとどいた翌日が開戦であった（第一次大戦勃発は七月二八日、ドイツの参戦は八月三日）。退去をもうしたので齋藤にエディングルはアムステルダムにいる自分の門下 C. J. Ariëns Kappers を紹介したが、オランダもいつ戦争にまきこまれるかわからぬ状態で、齋藤はオランダをへてやつのことでイギリスにわたった。『神経学雑誌』第一三巻第九号（一九一四年）雑録の「欧州留学の諸氏」に、大戦にまきこまれて進退きわまつている留学生として名があがっているのは、齋藤のほかにも布施現之助、鈴木允、鳥瀉隆三、淺山忠愛、加藤豊次郎、木村男也、島田吉三郎、杉田直樹、及能謙一、池田泰雄、丸山震五郎、山田基、石原正次、佐藤淺次郎、森田資光、小澤修造である。また「齋藤及び布施氏は瑞西にて暫く研學せらるる由」とある。ミュンヘンを八月九日にたつた杉田が八月一四日にロンドンからだした通信（『神経学雑誌』第一三巻第一〇号、一九一四年）には、「齋藤玉男様は和蘭アムステルダム大学のカッポレス教授の許にて当分御研究の由承り及候へども」とあるが、それどころでなかったのである。

フランクフルト・アム・マインをでおくられて一時拘留された田澤鏝二もロンドンで合流し、合州国いきをさそつたので、イギリス滞在一か月のち大西洋をわたつた。そのときいっしょだった田代豊助（一九〇〇—一九二二年）と長崎医学専門学校で衛生学・細菌学を教授していた）が、「日本にかえつてもしょうがないだろう、伝染病研究所時代に世話してやった野口英世がロクフェラにいるからいつてみよう」というので、野口に精神科をやるといつたら、アドルフ・マイヤを紹介された。また、切手代までなくなった齋藤に野口は一〇〇ドルあまりをかしてくれた。

当時マイヤはボルティモアのジョンズ・ホプキンス大学にいた。齋藤の履歴書（『八十八年をかえりみて』）では、同大

学精神病学教室留学の日を一九一四年一〇月一九日としている。マイヤは松原三郎伝によせた「序」(『俤』)に、「そのうちときどきわたしたちのところに来た日本の医師たちがあたたかくむかえられたのは、かれ(松原)のおかげである」とかいている。齋藤もマイヤにあたたかくむかえられたのである。

回顧談によれば、教室費はとられなかった。仕事は脳の組織学で、「私は Meyer の講義も出ないし病室へもはいらないで、もつぱら研究室で(中略)アメリカの教室でやったのは、お殿様でやったんです。Präparatin が二人おりましたね、写真技師がおつて、写真は彼が皆撮つてくれて、私はのぞくだけで、それがまた私の仕事だったんです。アメリカだから、こんなに沢山、写真がいくらでもとれたし。」ネズミを湯のなかでおよがせつづけたときの中樞神経系の変化をしらべたもので、これは帰国後にイギリス語でかかれて、学位論文となった。

マイヤについて齋藤は『明治・大正時代の精神医学関係懐旧談』(日本精神病院協会・東京、一九六八年)で、「彼は常識人でしてね。彼自身は、自分の専門は病理とサイカアトリーというんだ。それはドイツとかヨーロッパの精神医学を引き写しにするのとはちがう、そして彼の終局の目的は、精神医学というものは、純然たる社会医学の一部門であるが、社会医学というものの第一陣が精神医学であるべきだ、そういう見識はあつたわけです」とかたる。回顧談で齋藤は、後年の社会精神医学面の発言について、マイヤの影響ではないというが、マイヤの影響は否定できまい。おなじ『懐旧談』で松原三郎(松原三郎の子)がかたつているところでは、ジョンズ・ホプキンス大学図書室のアドルフ・マイヤ・コレクションには、齋藤のかいたものは松原三郎のものとともに保存されているという。

齋藤は、「あの頃のアメリカの精神科というものもたいしたことはなかつたので、こつちははじめからなめてかかつていたんですよ」(『八十八年をかえりみて』)、また「ちがいが目についた点といえますと、アメリカでは看護科というものの重みが、院内でずいぶん高かつたです。看護婦長は、場合によると、医員に指図をしたです。看護科というのは、精神病院では中枢ですね」(『明治・大正の精神医学関係懐旧談』)とかたつていいる。

齋藤はほぼ一年半を合州国ですごしたのち、一九一六年（大正五年）に帰国した。留学の前に齋藤は東北帝国大学教授候補とうわさされていた。仙台医学専門学校教授兼宮城病院内科部長であった島柳二は一九〇七年二月二〇日文部省から精神病学および神経病学の研究のためドイツ・オーストリーへ留学を命ぜられ、一九〇九年九月三〇日に帰朝したが、一九一〇年六月に病没し、そのうち精神病学専任の教授はいなかった。ところが、一九一三年一月に東京帝国大学医科大学を卒業して青山内科に勤務していた丸井清泰が、医科大学長として権力のあった青山胤通におかれて、一九一五年東北帝国大学医学専門部講師、一九一六年三月同医科大学助教授に任せられ、同年一〇月合州国留学にたった。齋藤にはほかの教授の話しでもかけたことがあったが、結局官公立育機関の教職はあきらめざるをえなかったのだろう。

齋藤は帰国すると一九一六年二月横浜脳病院顧問と、五月には王子脳病院（東京）の顧問となった。このときに王子脳病院では齋藤の要求で研究室をつくった（『齋藤玉男先生の横顔』所載の「齋藤玉男先生来歴」の談話）が、これが小峰研究所（後述）の濫觴となったものである。また王子脳病院長小峯茂之の留学中は、実質的責任者となっていた。他方一九一六年六月一二日には、日本医学専門学校教授（精神病学担当）を嘱託され、一九三〇年四月一日の同学校の大学昇格とともに、ひきつづき教授を嘱託された。といっても精神病学を講義するだけで、外来も病室もなかった。その講義には精神分析学の紹介もあつたりして、なかなか特色あるものであつた。一九二三年（大正十二年）四月八日には東京市品川区にゼームス坂病院（四〇床）を開設して院長となり、そこに東京神経生物学研究所を併設した。光太郎夫人高村智恵子が入院し、なくなったのはこの病院であつた。

一九三一年（昭和六年）六月二二日東京府立松沢病院副院長に就任した（三宅院長）。東京帝国大学教授との兼任院長では院務によわいので、将来は専任院長にという東京府庁の含みもあつたが、部外者となってひさしい先輩にたいする医局内からの反撥もつよかつた。齋藤の人柄もあつて医局内のしこりは解消されたが、齋藤が副院長として積極的に腕をふるうことはなかつたようである。そして一九三六年に一七歳下の内村祐之が院長になると、二年後の一九三八年三月

三一日に院長がやりやすいようにと副院長を辞した。戦局がきびしくなると齋藤は一九四四年九月三〇日にゼームス坂病院（松沢病院副院長時代は門下を院長にしていた）を閉鎖して売却し、日本医科大学教授も同日に辞職して故郷に疎開した。敗戦後の齋藤は進駐軍国内検閲部高等翻譯官（その具体的職務内容はうかがわずじまいになった）につづいて、いくつかの精神科病院につとめた。

帰国後の研究としては精神疾患の遺伝に関するものなどもあるが、とくに注目すべきは精神科医療のあり方についての発言である。主として月刊誌「脳」に発表された論文の題名をいくつかひろうと、「精神病者の家庭委託療護制度とその国際的鳥瞰図」（一九三二年、冷泉禎太郎名義）、「現在の精神病診療機関の運用は停止したエスカレーターに比較出来るのでないか」（一九三三年）、「何故に我国では精神病関係の社会事業が久しく振はなかつたか」（一九三三年）、「どうすれば精神病看護事業が向上振作されるか」（一九三三年）、「臨床精神病学と環境学（精神病院の社会サービス部に就て）」（一九三三年）、「精神病行政の一部面としての家庭委託保護制度」（一九四〇年）などがある。これらの表題だけからも齋藤の構想の広さ・深さは察せられよう。「現在の精神病診療機関の運用は停止したエスカレーターに比較出来るのでないか」（脳、第七卷第二号、一九三三年）の約言をみると、――

- 一、精神病は社会悪の一種である社会病に属すること。
- 二、従て精神病（殊に無産者の）治療は社会の義務であり、之には医学的治療と社会的予防並に社会的治療が必要であること。
- 三、病院治療は精神病治療の一部局を担当するに過ぎず、病前保護（予防）と院外療護が之に劣らず必要であり、三者の相伴はない精神病治療施設は、施設として不完全であり、従て効果も充分であり得ないこと。
- 四、精神病者にせよ精神薄弱者其他にせよ、社会的重要度は著明な異常の場合よりは所謂中間者に於て大きく、従て社会的予防及び治療の標的は主として之に向けられる方がより効果的であるべきこと。

とある。現在のように病院治療しなくては、齒のぬけたエスカレータが運転も停止したようなもので、場所塞げなだけである、というのが表題の意味である。齋藤のこの構想は日本では現在でも充分には実現されていないものであり、一九三三年という年にこの構想をくみだてたことには、ただ驚嘆するしかない。さきほどのべたように、『八十八年をかえりみて』中の回顧談で齋藤は、わたしの質問にこたえて、この構想についてマイヤの影響を否定し、合州国にもこういった医療体系についての考えはなかったとのべたあとで、「この頃は、我ながら少し神がかつていた様です。まだ、何も形のない所へ、あるいは未開拓の野原に突つ立つたようなつもりでやつたんだから、自分ながら潤達に書けたと、そうは思いますね」とかたられた。しかし、後述のようなマイヤの仕事を見ると、その影響は否定できない。

齋藤はまた新潟の中村隆治とともに、西ヨーロッパ語文の“*Folia Psychiatrica et Neurologica Japonica*”を一九三三年から刊行した。はじめは私費刊行で、一九五二年の第六巻から日本精神神経学会の発行となった。齋藤は二〇年ちかく一九六四年までこの編集長であり、添削、校閲、校正にも力をいれた。これも合州国留学の経験をもった人でなくてはできぬことであつた。

齋藤は一九七二年（昭和四七年）一〇月一三日に老衰によりなくなった、九二歳。日本の精神病学界で主流の中心になることはなかったが、時流をはるかにさきがけた見識をもった人であつた。それは、お人柄による面もあつたが、合州国でマイヤのもとにまなんだことの影響もおおきかつたろう。

2、杉田直樹

杉田直樹については、堀要「杉田直樹」（日本の精神医学一〇〇年を築いた人々・第二部）（臨床精神医学、第一〇巻第四号、一九八一年）がある。杉田は啓蒙的文筆活動およびラジオ放送を旺盛におこなつた。谷崎潤一郎はかれの友人で、谷崎の作品には杉田の著作から着想をえているものもおおいと多く。しかし、わたしには杉田の著作の全容はまだつかめていない。

杉田は一八八七年(明治二〇年)九月三日に東京市に生まれ、第一高等学校をへて一九一二年(大正二年)二月二八日に東京帝国大学医科大学を卒業した。翌年一月には精神病学教室にはいり、副手となった。教室が東京府巢鴨病院内にあった時代であるが、杉田は巢鴨病院医員にはなっていない。学生時代から呉教授のところに出入りして気にいられていたといわれ、すぐに留学することが予定されていたのだろう。同年一〇月二二日に文部省留學生としてヨーロッパにむかった(齋藤は『八十八年をかえりみて』で、「あの頃は杉田君なんて才子はピョッピョッとこつちより先に行つちやつた」とはなしている)。一二月三〇日づけ医局あての通信⁽¹²⁾(神経学雑誌、第二三巻第二号、一九一四年)によれば、一二月なかばにベルリン着、関係施設を見学していて、一月一〇日にミュンヘンのクレペリン教室にはいる予定であった。次信(神経学雑誌、第二三巻第一〇号、一九一四年)は一九一四年八月一日ロンドン発で、戦乱のため研究材料はシピールマイエル教授の手もとに、衣類書類はミュンヘン領事館にあずけて、八月九日ミュンヘンをたつて一九日ロンドンにはいった。「研究報告の一部辛うじて国境通過を許され行李の底に収め得られ候」とある。シピールマイエル(Walther Spielmeier)の指導で「老耄痴呆における老人斑の発生、殊にアルツハイメル氏病の病理について」の研究をしたのである。帰国したのは一〇月か。十一月二日の精神病科談話会で留學中の仕事として老耄性痴呆につき報告している。

杉田はふたたび文部省留學生として合州国にいくため、一九一五年(大正四年)四月二日に横浜をたつた。杉田が合州国で主として師事した人の評伝「ドナルドソン」(医事公論、第一四一五号、一九三九年)には、栗山、太平、柿内などの諸先輩とサンフランシスコ港に上陸したときには、合州国には学修視察上の手懸りはなく、ロクフェラ研究所に野口博士をおとずれても、日本人嫌いで剣もホロロの挨拶だった、とかく。教室あて五月一日づけ通信および次信(神経学雑誌、第一四巻第七号、同第八号、一九一五年)によれば、四月二九日ニューヨーク市いり、つてをもとめてマンハタン州立精神病院内研究所に Hoch をたずねた(マイヤが所長をしていて、また松原が仕事したところである、杉田は松原からこのことをきいていたのだろう)。一年ぐらいして研究はボルチモアのマイヤ教授のところに行くのがよい、しばらくは病院で

臨床面の見学をしていたらどうか、とのホチのすすめであった。組織学の研究は、輸入がたえてセロイザン皆無、色素皆無でほとんど手がつけかねた。フィラデルフィアのウイスタ研究所 (the Wistar Institute of Biology and Anatomy) にいるときいていた日本神経学会会員の畑井新喜司を同所にたずね幹旋をおねがいし、また吳先生から同研究所の دونالدソン (Henry Herbert Donaldson) に依頼の手紙をいただいたから同氏はたいへん期待してくれている。六月中旬にうつることにして、州立病院にかようかたわら、あちこちの施設をまわっている。野口博士にも親切な世話をうけている (と、こちらの通信にはある)。

ところで、杉田がみた当時の合州国精神病学の現状はあとの「費府通信」(神経学雑誌、第一六卷第一号、一九一七年)にみられる。「米國精神病学界の傾向は多く精神分析法に向ひ居り化学又は病理解剖学方面より研究する学者極めて少なく、従来独逸にて爲せし如き仕事に従ふ事頗る困難にて」、「但し病院の組織、History Taking 患者治療法等の上には米人独得の Efficiency の方法に大に学ぶべきもの尠なからず」などある。かれはまた「紐育市警察部内に新設せられたる犯罪者精神状態検査所並びに同所に於て用ゐらるる新案智力検査法に就て」を『神経学雑誌』に紹介している(第一五卷第一〇号、一九一六年)。

ウイスタ研究所におけるかれの研究は Donaldson の指導下に順調にすすんだ。それはアルビノ・ラットにつき大脳皮質発達と比較研究をしたもので、計八篇が、「The Journal of Comparative Neurology」(あとは「比較神経学誌」とし、第二八卷、第二九卷、一九一七年、一九一八年)にのせられている。しかもそれらには、杉田がかいたものを写真版にした日本語抄録がつき、とくに第二九卷の抄録部分には「特別日本号」といわれている。「費府通信」には Greenman 所長が、日本の医学雑誌に外国文の抄録があるからこちらの雑誌にも日本文の抄録をつけてやろうと発議され、同氏はこの日本版がなによりもの自慢である、とある。またそのまえの通信(神経学雑誌、第一六卷第六号、一九一七年)には、「飢餓による幼児中枢神経系発達の阻碍」の実験をおえ、つぎに「内分泌異常に基く中枢神経系発達の障害又は促進」

の実験にとりかかる予定である、とあるが、これらが発表されたものはみつげだしていない。臨床面では一九一七年一月から週半日ずつ大学の精神科、神経科で研修した。

杉田は一九一八年五月一日に帰国し、翌年には医学部講師となり、さらに一九二一年四月二五日同助教授に任ぜられた。研究は大脳皮質の微細構造および児童問題を主としていた。先輩であり助教授であった三宅鑛一は東京府巢鴨病院の松沢村移転にともない一九一九年に松沢病院副院長となったので、むしろそちらが本務となっていた。吳教授は杉田を自分の後任にのぞんでいたらしい。また、司法精神病学、社会精神病学を主とする精神病学第二講座の設置が一九二四年七月七日の医学部教授会でみとめられていた(日本医事新報、第二二六号、一九二四年)。吳の後任には一九二五年五月四日の教授会で三宅がえらばれたが、『日本医事新報』第一五五号の記事には、ちかく二講座になるので杉田は落胆におよばず、とある。ところが、そののち「天降り」的に物療内科(真鍋嘉一郎教授)新設がきまった余波だろう、精神病学第二講座設置は立ち消えとなる。杉田は一九二七年(昭和二年)一月四日東京府立松沢病院副院長兼東京帝国大学医学部講師となった。ついで愛知医科大学の官立移管に際し、一九三二年五月二〇日に名古屋医科大学教授に任ぜられた(松沢病院副院長として杉田の後任になったのが齋藤である)。

名古屋での研究の中心は精神乖離症(「精神分裂病」の訳語が定着するまで杉田はこの訳語をつかっていた)および精神薄弱であった。杉田のもとで「児童治療教育相談室」が開設され、杉田はまた私費で八事(杉山)脳病院を買収して八事少年寮を開設した(精神薄弱児童養護施設三好学園の前身)。東京医科大学教授就任がきまって、一九四九年(昭和二十四年)四月に名古屋をさつたが、正式発令の直前一九四九年八月二九日狭心症のため東京で死亡した。六一歳。

合州国でまなんだものがその後の杉田のなかでどうかされたかは、解明できていない。東京帝国大学の精神病学教室は生物学的伝統にたつと一般に理解されているが、吳―三宅と社会精神病学への関心もふかく、第二講座開設は吳の熱願であった。杉田の合州国における研究は脳組織学が主であったが、かれが見聞してきたものが社会精神病学への風

をさらにつよめただろうと察せられるのである。小児精神病学についてもかれの合州国留学の影響が推定できる。

(あと次号)

注は(下)の末尾に一括して掲載する。

(精神科医療史研究会・東京)